

## 『寿福百人一首』紹介

菊池 真一

「日本古典籍総合目録」に、『寿福百人一首教鑑』はあるが、『寿福百人一首』はない。両者は別物であろう。筆者は明治版と思われる『寿福百人一首』二本を所有しているので、紹介したい。

筆者所蔵本は、いずれも中本。片方には題簽・見返し・奥付があるが、他方にはそれらが欠けている。本文部分（中身）は同一である。

題簽は「寿福百人一首 全」、見返しには中央に「寿福百人一首」とあり、右側に「訂正再刻」、左上に「戊辰季夏」、左下に「錦森堂蔵版」とある。裏見返しには、広告の奥に「東京書肆 江戸馬喰町二丁目 錦森堂 森屋治兵衛版」とある。

頭書には、次の項目が掲げられている。

源氏五十五章（章名と図のみ）

大和言葉大概

七夕詩歌づくし

婚礼之式法

五節句之由来

以下、百人一首と頭書とを翻刻紹介する。振り仮名省略。

一、『寿福百人一首』本文

天智天皇

秋の田の刈穂の庵の苫をあらみ我衣手は露にぬれつゝ（一才）

持統天皇

春過て夏きにけらし白妙の衣ほすてふ天のかく山（一ウ）

柿本人麿

あし曳の山どりの尾のしだりをのながし夜をひとりかもねん（二才）

山辺赤人

田子のうらにうち出て見れば白妙の富士の高根に雪はふりつゝ（二ウ）

猿丸太夫

奥山にもみぢふみわけ啼鹿のこゑきくときぞ秋はかなしき（三才）

中納言家持

鵲のわたせるはしにをく霜の白きをみれば夜ぞ更にける（三ウ）

安倍仲麿

天のはらふりさけみればかすがなる三笠の山に出し月かも（四才）

喜撰法師

わが庵はみやこのたつみしかぞすむよをうぢ山と人はいふなり（四ウ）

小野小町

花の色はうつりにけりないたづらに我身よにふるながめせしまに（五才）

蝉丸

これやこの行もかへるもわかれてはしるもしらぬもあふさかの関（五ウ）

参議篁

和田の原八十鳶かけてこぎ出ぬと人にはつげよ海人のつり船（六才）

僧正遍昭

天津風雲のかよひぢ吹とぢよ乙女の姿しばしとゞめむ」(六ウ)  
陽成院

つくばねの峯よりおつるみな  
の川恋ぞつもりて淵となりぬる」(七  
オ)

河原左大臣

みちのくのしのぶもぢぢり誰ゆへに  
みだれそめにし我ならなくに」

(七ウ)

光孝天皇

君がため春の野にいでゝわかなつむ  
我衣手に雪はふりつゝ」(八  
オ)

中納言行平

立わかれいなばの山の峯におふる  
まつとしきかば今かへりこむ」

(八ウ)

在原業平朝臣

千早ふる神代もきかずたつた川から  
くれなゐに水くゞるとは」(九  
オ)

藤原敏行朝臣

住の江のきしによるなみよるさへ  
や夢のかよひぢ人めよぐらん」

(九ウ)

伊勢

難波がたみじかきあしのふしの間  
もあはで此世をすぐしてよとや」

(十オ)

元良親王

わびぬれば今はたおなじなにはなる  
身をつくしてもあはむとぞ思  
ふ」(十ウ)

素性法師

今こむといひしばかりに長月の有  
明の月をまち出つるかな」(十  
一オ)

文屋康秀

吹からに秋のくさ木のしほるれば  
むべ山かぜを嵐といふらん」(十

一ウ)

大江千里

月見ればちゞに物こそかなしけれ  
我身ひとつの秋にはあらねど」  
(十二オ)

菅家

このたびはぬさもとりあへず手向  
山紅葉のにしき神のまに／＼」

(十二ウ)

三条右大臣

名にしおはゞあふさか山のさねか  
つら人にしられてくるよしも哉」  
(十三オ)

貞信公

小倉山峯のもみぢ葉心あらば今一  
たびの御幸またなん」(十三ウ)

中納言兼輔

みかの原わきてながるゝいづみ川  
いづみきとてか恋しかるらん」  
(十四オ)

源宗于朝臣

山ざとは冬ぞさびしさまさりける  
人めも草もかれぬと思へば」(十  
四ウ)

凡河内躬恒

心あてにをらばやをらん初霜の  
おきまど」(ママ)せるしら菊の花  
(十五オ)

壬生忠岑

有明のつれなく見えし別れより  
暁ばかりうきものはなし」(十五  
ウ)

坂上是則

朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉  
野の里にふれる白雪」(十六オ)

春道列樹

山河に風のかけたるしがらみはな  
がれもあへぬもみぢなりけり」  
(十六ウ)

紀友則

久かたのひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらん」(十七才)

藤原興風

誰をかも知る人にせむ高砂の松もむかしの友ならなくに」(十七ウ)

紀貫之

人はいざ心もしらずふるさとは花ぞむかしの香に匂ひける」(十八才)

清原深養父

夏の夜はまだ宵ながら明ぬるを雲のいづこに月宿るらむ」(十八ウ)

文屋朝康

しら露に風のふきしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞちりける」(十九才)

右近

忘らるゝ身をば思はずちかひてし人の命のをしくもあるかな」(十九ウ)

参議等

あさぢふのをのゝしのはら忍ぶれどあまりてなどか人のこひしき」(二十才)

平兼盛

しのぶれどいろに出にけりわが恋は物やおもふと人のとふまで」(二十ウ)

壬生忠見

恋すてふわが名はまだき立にけり人しれずこそおもひそめしが」(二十一才)

清原元輔

契りきなかたみに袖をしばりつゝすゑの松山なみこさじとは」(二十一ウ)

中納言敦忠

あひ見ての後の心にくらぶればむかしは物を思はざりけり」(二十二才)

中納言朝忠

あふ事の絶てしなくば中ノゝに人をも身をも恨みざらまじ」(二十二ウ)

謙徳公

哀れともいふべき人はおもほえて身の徒らになりぬべき哉」(二十三才)

曾祢好忠

由良のとをわたるふな人かぢをたえ行衛もしらぬ恋のみちかな」(二十三ウ)

恵慶法師

八重葎しげれるやどのさびしきに人こそ見えね秋は来にけり」(二十四才)

源重之

風をいたみ岩うつなみのおのれのみくだけでもを思ふころかな」(二十四ウ)

大中臣能宣朝臣

御垣守衛士のたく火の夜はもえて昼はきえつゝものをこそ思へ」(二十五才)

藤原義孝

君がためをしからざりし命さへながくもがなとおもひけるかな」(二十五ウ)

藤原実方朝臣

かくどだにえやはいぶきのさしもぐささしもしらじなもゆる思ひを」(二十六才)

藤原道信朝臣

明ぬればくるゝものとはしりながら猶うらめしき朝ぼらけ哉」(二十六ウ)

右大将道綱母

歎きつゝひとりぬるよのあくるまはいかに久しきものとかはしる」  
(二十七才)

儀同三司母

わすれじの行末まではかたければけふをかぎりの命ともがな」(二十七ウ)

大納言公任

滝の音は絶て久しくなりぬれど名こそながれて猶聞えけれ」(二十八才)

和泉式部

あらざらむこの世のほかの思ひ出に今一たびの逢事もかな」(二十八ウ)

紫式部

めぐりあひてみしやそれともわかぬまに雲隠にし夜半の月哉」(二十九才)

大弐三位

有馬山いななさゝはら風ふけばいでそよ人をわすれやはする」(二十九ウ)

赤染衛門

やすらはでねなまじものをさよふけてかたぶく迄の月をみし哉」(三十才)

小式部内侍

大江山いくのゝ道の遠ければまだふみもみず天のはし立」(三十ウ)

伊勢大輔

古しへのならの都の八重ざくらけふ九重に匂ひぬるかな」(三十一才)

清少納言

夜をこめて鳥のそら音ははかるとも世にあふさかの関はゆるさじ」(三十一ウ)

左京大夫道雅

今はたゞ思ひたえなんとばかりを人づてならでいふよしもかな」  
(三十二才)

権中納言定頼

朝ぼらけうづの川霧たえ／＼にあらはれわたる瀬々の網代木」(三十二ウ)

相模

恨みわびほさぬ袖だにあるものを恋にくちなん名こそをしけれ」  
(三十三才)

前大僧正行尊

もろともにあはれとおもへ山桜花よりほかにしる人もなし」(三十三ウ)

周防内侍

春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなくなつゝん名こそをしけれ」(三十四才)

三条院

心にもあらでうき世にながらへば恋しかるべき夜半の月かな」(三十四ウ)

能因法師

あらしふく三室の山のもみぢ葉はつつたの川のにしきなりけり」  
(三十五才)

良暹法師

さびしさに宿を立出て眺ればいつこもおなじ秋のゆふぐれ」(三十五ウ)

大納言経信

夕ざれば門田の稲葉をとづれてあしのまるやに秋風ぞふく」(三十六才)

祐子内親王家紀伊

音にきくたかしのはまのあだなみはかけしや袖の濡もこそすれ」  
(三十六ウ)

権中納言匡房

高砂の尾上のさくらさきにけり外山の霞たゞずもあらなむ」(三十七才)

源俊頼朝臣  
うかりける人をはつせの山おろしはげしかれとはいのらぬものを」(三十七才)

藤原基俊  
契りをきしさせもがつゆを命にて哀れことしの秋もいぬめり」(三十八才)

法性寺入道前関白大政大臣  
和田の原こぎ出て見ればひさかたの雲井にまがふおきつしらなみ」(三十八才)

崇徳院  
瀬をはやみ岩にせかるゝ滝川のわれても末に逢んとぞ思ふ」(三十九才)

源兼昌  
淡路鳶かよふちとりの啼声に幾夜ねざめぬすまの関守」(三十九才)

左京大夫顕輔  
秋風にたなひく雲の絶間よりもれ出る月の影のさやけさ」(四十才)

待賢門院堀川  
長からん心もしらず黒髪のみだれてけさは物をこそおもへ」(四十才)

後徳大寺左大臣  
ほとゝぎすなきつるかたをながむれはたゞ有明の月ぞのこれる」(四十一才)

道因法師  
おもひわびさても命はあるものをうきにたへぬはなみだなりけり」(四十一才)

皇太后宮大夫俊成

世の中よ道こそなけれ思ひいる山のおくにも鹿ぞなくなる」(四十二才)

藤原清輔朝臣  
ながらへばまだ此ごろや忍ばれんうしと見し世ぞ今は恋しき」(四十二才)

俊恵法師  
夜もすがら物思ふころは明やらで闇のひまさへつれなかりけり」(四十三才)

西行法師  
歎けとて月やは物をおもはするかこち顔なる我なみだ哉」(四十三才)

寂蓮法師  
むら雨の露もまだひぬ槇の葉に霧たちのぼる秋のゆふぐれ」(四十四才)

皇嘉門院別当  
難波江のあしのかりねの一夜ゆへ身をつくしてや恋わたるべき」(四十四才)

式子内親王  
玉の緒よたへなばたえねながらへば忍ぶることのよほりもぞする」(四十五才)

殷富門院大輔  
見せばやなをじまのあまのそでだにもぬれにぞぬれし色はかはらず」(四十五才)

後京極摂政前太政大臣  
きり／＼すなくや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかもねん」(四十六才)

二条院讃岐  
我袖はしほひに見えぬ沖の石の人こそしらねかはくまもなし」(四十六才)

鎌倉右大臣

世の中はつねにもかもな清こく蚤の小ぶねのつなでかなしも(四十七才)

参議雅経

みよしのゝ山の秋風さよふけてふるさと寒く衣うつなり(四十七ウ)

前大僧正慈円

おほけなくうき世の民におほふかなわが立衵に墨ぞめの袖(四十八才)

入道前大政大臣

花さそふあらしの庭の雪ならでふり行ものは我身なりけり(四十八ウ)

権中納言定家

こぬ人をまつほのうらの夕なぎにやくやもしほの身もこがれつゝ(四十九才)

正三位家隆

風そよぐならの小川の夕ぐれはみそぎぞ夏のしるしなりける(四十九ウ)

後鳥羽院

人もをし人もうらめしあぢきなく世を思ふ故に物おもふ身は(五十才)

順徳院

百敷やふるき軒端のしのぶにも猶あまりあるむかしなりけり(五十ウ)

## 二、頭書翻刻

源氏五十五章(章名と図のみ)

桐壺(一才) 簞木(一ウ) 空蝉(二才) 夕顔(二ウ) 若紫(三才)

末摘花(三ウ) 紅葉賀(四才) 花宴(四ウ) 葵(五才)

榊(五ウ) 花散里(六才) 須磨(六ウ) 明石(七才) 澁

標(七ウ) 蓬生(八才) 関屋(八ウ) 絵合(九才) 松風(九

ウ) 薄雲(十才) 朝顔(十ウ) 乙女(十一才) 玉鬘(十一ウ) 初音(十二才) 胡蝶(十二ウ) 蛸(十三才) 瞿麦(十三ウ) 篝火(十四才) 野分(十四ウ) 行幸(十五才) 蘭(十五ウ) 槿柱(十六才) 梅枝(十六ウ) 藤裏葉(十七才) 若菜上(十七ウ) 若菜下(十八才) 柏木(十八ウ) 横笛(十九才) 鈴虫(十九ウ) 夕霧(二十才) 御法(二十ウ) 幻(二十一才) 匂宮(二十一ウ) 竹川(二十二才) 紅梅(二十二ウ) 橋姫(二十三才) 椎本(二十三ウ) 総角(二十四才) 早蕨(二十四ウ) 寄生木(二十五才) 東屋(二十五ウ) 浮舟(二十六才) 蜻蛉(二十六ウ) 手習(二十七才) 夢浮橋 源氏五十五章終(二十七ウ)

大和言葉大概

すべて女は美めかたちより物ごしといへば常のこと葉をずみぶん心がけ花奢にいふべき事を第一のたしなみなれば都女臈の詞をあらましこゝにするし侍る

父をたらちを又ともじ

母をたらちめ又かもじ

男子をわこと言

女子をおごりやうと言(二十八才)

御内儀をおくさまといふ

そなたをそもじと云

ねるをおしづまると云

おきるをおひなると云

御そくさいをおそくもじといふ

はづかしきをはもじといふ

おめにかゝるをめもじと云

せんこうをせんもじと云

たよりをたつぎと云

御文を玉づさと云

めづらしきをめづらかと云

きうノハをはやノハと云  
推量をすゐもじといふ

ふうふをいもせと云

面目ないをおましと云」(二十八ウ)

自らの書を水ぐきと云

十三夜を小もち月といふ

十四の月をまつ宵と云

十五夜をまん月といふ

十六夜をいざよひと云

異見をいさめといふ

あねをいねといふ

いもつとをいろねと云」(二十九オ)

わづらひをわもじと云

夜のものをしとねと云

小そでをごふくといふ

わたをおなかと云

帯をおもじと云

かやをかちやうと云

はな紙をさつしといふ

べにおいろといふ

米をうちまきと云

めしをぐこと云

みそをむしと云

水をおひやと云

さけをさゝと云

もちをかちんと云

ぼたもちをおはぎと云」(二十九ウ)

あまざけをあま九こんと云

ちまきをまきといふ

昼めしをおこぐといふ

こぬかをまちかねといふ  
こんにやくをにやくと云  
鍋かまをくるといふ

鮓をすもじと云

ゆのこを御ゆのしたといふ」(三十オ)

大こんをからものと云

あさつけをあさノハといふ

香の物をかうノハといふ

しんこをしらいと云

だんごをいしノハと云

豆腐をおかべといふ

てんがくをおでんと云

一切の魚をおなまと云

いわしをおほそといふ

かずの小をかずノハといふ

ぬかみそをさゝちんと云

赤はんをこはぐと云

さうめんをそろといふ

あづきをあかといふ

なすひをなすと云」(三十ウ)

ほしなをひばといふ

まんぢうをおまんといふ

なをおはといふ

しほをしるものと云

髪洗をおぐしすますと云

人をよぶをめすといふ

泣をむづかると云

あるくをおひるいと云」(三十一オ)

夜着ふとんをよるのものといふ

ゆぐをゆもじと云

れんぎをこがらしと云  
いがきをせきもりと云  
せつかいをうぐひすといふ  
しやくしをしやもしと云

錢をおあしと云

同百文を一すじと云

貝合を貝おほいと云

哥がるたをついまつと云

ねぎをひともしといふ

からを卵の花と云

ごぼふをこんといふ

此余かづゝあれど有りくましを記し畢」(三十一ウ)

七夕詩歌づくし」(三十二才)

露応別淚珠空落雲是残粧髻未成

天の川こよひ逢瀬の行すゑをよるづ代かけてなをちぎるらむ

去衣曳浪霞応湿行燭浸流月欲消

天の川ながるゝ月も心してまれにあふせのひかりとゞめて」(三十二ウ)

十二ウ)

憶得少年長乞巧竹竿頭上願糸多

としごとに逢とはすれど七夕のぬる夜のかすぞすくなかりける

詞託微波雖且遣意期片月欲為媒

一とせをひと夜と思へと七夕のあひみん秋のかぎりなき哉」(三十三才)

十三才)

七夕のあふ夜の庭にをくことのあたりにひくはさゝがにのいと

たきものをくものころもに匂はせてたなばたつめの暮をまつらん

しら露の玉のをことの手向して庭にかゞぐる秋のともし火

七夕のいははたたてゝ織布の秋さりころもたれかそめけん」(三十三ウ)

十三ウ)

天の川くらしかねたるともしつまわたるをいそぐぬさ手向なり

かきつくるかぢの七葉のおもふことなをあまりあるあきの夕ぐれ」

(三十四才)  
たなばたのいのる手向やしげからんあけてそかえるかぢのことの  
葉

夜もすがら星合の空にたてまつる香のけふりや雲となるらん

たのめおく一夜ばかりを七夕の心ながくもまちわたるらむ

もみぢ葉の色もいかにと空にのみおもひにわたる天の川はし」(三十四ウ)

十四ウ)

漕かへるほどこそなけれ天の川いかにさだめし船路なるらん

年にまつならひつら天の川あふ瀬はちかきわたりなれども」(三十五才)

十五才)

秋をへてまれなる恋のなみだかやもみぢのはしをわたしそめけん

天の川あかつきやみのかへるさよまたたどらるゝあさせしら波

恋ノてこよひばかりや七夕のまくらにちりのつもらざるらん

七夕のこゝろのうちやいかならん待こしけふのゆふ暮空」(三十五ウ)

十五ウ)

またくもる天の川原に秋立て紅葉をわたるなみの浮橋

天の川一夜ばかりのあふせこそつらきかみ代の怨みなるらん」(三十六才)

十六才)

七夕の苔の衣をいとはずば人なみノにかしもしてまじ

七夕の雲の衣をひきかさねかへさでぬるや今宵なるらん

秋来ても露置袖のせばければたなばた姫に何をかさまじ

年をへてながき契りの絶せぬはためしにひける七夕のいと」(三十六ウ)

十六ウ)

神代よりいなおほせ鳥に見なれてやたなはた姫もちぎり初けん

七夕の舟路はさしもとをからしなどひとゝせにひとわたりする」

(三十七才)

たなばたの雲の衣をいく秋かかさねてたえぬ契り成らむ

七夕の心のつまはこゝろしてふきなかへしそ秋のはつ風

浅からぬ契りをぞおもふ天の川あふせはとしの一夜なれども

七夕のわが心とやあふことをとしに「たび契りそめけん」(三十七才)



七ウ)

幾とせをいくめぐりても七夕のちぎりは絶じ夜半の下おび  
明行ば河瀬のなみの立かへりまた袖ぬらす天の羽ごろも」(三十  
八才)

天の川霧たちのぼる七夕の雲のころもかへるころかも  
草の葉にけふとる露や七夕の秋のたむけに結びそめけん

よそにだに待こそわたれ天の川つまむかへ船さぞいそぐらん  
待いたる絶には遠き月日にてけふのみかよふかさゝぎのはし」(三  
十八ウ)

七夕のたへぬ契りをそへんとやはねをならぶるかさゝぎのはし  
ひこ星の天の岩船ふなでしてこよひやいそに磯まくらす」(三  
十九才)

七夕のむすぶちぎりは天の川水かけ草の露もかはらじ

天の川とをき渡りにあらねども君がふなではとしにこそまで

七夕の今宵と頼むかけなれやゆふべの月の妻むかへふね

幾あきも絶ぬちぎりや七夕のまつにかひあるひと夜なるらん」(三  
十九ウ)

#### 婚礼之式法

夫女は親の家を出て夫の家をわか家とするゆゑ嫁と云字は女へん  
に家とかくなりよめ入」(四十才) しては夫の父母をわがおやと  
し朝夕よくつかへて嫁の道をよくつくすべし夫婚姻は媒をもつて  
互ひにむすぶ事なり媒なきは禽獸に同じされば相応のゑんをむす  
び両家にて媒を以てかための盃事ありてさて日限をさだめ男のか  
たよりしるしを送る」(四十ウ) 是を結納といへりこれも分限相  
応あり五荷五種それより下さまにいたりては手樽干肴にてもすむ  
事なり五荷五種るときは」(四十一才) 斗樽五荷(但し十ヲ) 肴  
五種なり或ひは鯛こんぶするめかつほぶしのし等なりこれに絹布  
をそへるなり或ひは小そで五重帯一筋小袖は紅白にて地は何にて  
も白むくきッ緋無垢きッ其ほかかのこをりもの類何にても分限相  
応なり如何ほど心やすきたのみにても帯は」(四十一ウ) 一筋そ

ゆるが本式なり其のち日をえらみて賀いりあるべし世俗にはよめ  
入のゝちむこいりする事ありこれ大きにあや」(四十二才) まり  
と知るべし下々にてはとかく勝手のよきを専一とすればいかやう  
になりとも心にまかせ式法にかゝわるまじまして相性などぎんみ  
入ざる事なり女の心だてと男の常の身もちをぎんみすること第一  
也其のち嫁の道具を賀のかたへ送りてのち輿に入る」(四十二ウ)  
なりよめいりの夜さまノの法しきある事なり然れども当代はた  
ゞかんりやくをもつはらとせりしかしこん礼の座つき盃事は」(四  
十三才) さして金銀のついへなきことなれば本式にありたしまづ  
嫁の輿いりて待女臈出むかひて化粧の間へともなひ行しばし休そ  
くさすべしさて座敷へ出るときはよめは主居とて下座也むこは客  
居とて上座なり床わきに居るなり座つき三方に手掛のしをいだす  
次に引わたし」(四十三ウ) 銚子ひさげを出すなりまづよめより  
盃をはじむるなり引わたしはかわらけ三まいむかふに昆布かち栗  
のしなり此うへの土器をよめ」(四十四才) 取て一ツこんうけ扱  
しやく人くわへ立さて一ツこんつぐ也これにて三こんなりそれを  
賀へつかはすむこ同じく三こんのみてこれを嫁につかはす嫁三こ  
んのみて又下の土器をとり三こんのみてむこへつかはす賀三こ  
んのみておさむるなりこれにて双方三こんツ、三度なり是を三々」  
(四十四ウ) 九度といへり酌加へ至つてむつかし口伝といふには  
あらねども業事ゆゑ筆にのべかたしこのさかづきごとすみて賀が  
はで入るなりさて」(四十五才) 雑煮をいだすよめまち女臈と  
もすはるなり引かへ本膳出る其のち賀より出したるむかい小袖を着  
かゆるなり是をいろなほしといへるそのゝちしうとしうとめけん  
ぞく一家さかづき事ありそれ五日めには五日がへりとも里びらき  
ともいふて親さとへ行里にてとつりうして賀」(四十五ウ) のか  
たへかえるを花がへりといへり其あいだ小しうと入り一家ひるめ  
とて親類ともだちをよびてもてなす事也猶またくはしくは」(四  
十六才) 道しる人にたづぬべし又聞のさかづきは嫁のかたより持  
参のものにて嫁より夫へさすこれどくみのこゝろえ也ある礼書に

こん礼のさかづきは夫より女へさすが吉事也且座つきのすいものにはまぐりを用ゆることはさるやんごとなき御方の仰せにより婚礼の座しきにて「(四十六ウ) ははまぐりのすい物に酒三こんをすすべからずとぞある人の仰せられけるとかや」(四十七才)

五節句之由来

正月七日若菜の節句ともいふ七くさはすゝなすゝしるせりなづな五ぎやうはこべらほとけのぎ是にて七種なりまた七くさのかゆはやくさうにて千とせをのぶるゆゑなり

あすからはわかかなつまんとしめし野にきのふもけふも雪はふりつゝ」(四十七ウ)

三月三日弥生の節句又上巳ともいふ蓬を用ゆることは実録に曰く野に草あり二月初て生ず草の葉白く清し三日にこれをとりに餅にす又桃の花を酒に」(四十八才) ひたしのめば百病を治すといへり

みちとせになるてふもゝのことしより花咲はるにあひにけるかな五月五日端午とも早苗月ともいふ家の軒端によもぎあやめをさしはさむと古書にみえたり内裏南殿のまへにおくとあり邪気をさるのいはれ也

きのふまでよそにおもひしあやめ草」(四十八ウ) けふわがやどのつまと見るかな

七月七日七夕といふまた文月ともいふ今宵けんぎう織女の二星あひあふといふこれをまつるに」(四十九才) 五色の糸にだいをつくり酒瓜などそなへて二星をいのるとぞ又けふ春秋をもちひてまつればぎやくのやまひをのぞくといえり

あひみてもなをゆく末のちぎりをやむすびかさぬる七夕のいと

九月九日重陽といふ菊月ともいふ九は陽の数のかぎ」(四十九ウ) りきはめなる義をばいへり菊を祝ふはほうそといへる仙人きくをもちひてより七百歳の寿を保ちたりまたしてうぼうといふ」(五十才) 仙人山にいりて菊の酒をのみてわぎはひをまぬかれたりといふいかにも目出たきはなにてぞあり諸人これをいはふて千歳を

たもつといふいはれなりとぞ

わがやどの菊のしら露けふごとに幾代つもりてふちとなるらん」(五十ウ)

万宝百人一首

錦葉百人一首

永寿百人一首

錦森百人一首

操百人一首

錦花百人一首

寿福百人一首

東京書肆

江戸馬喰町二丁目

錦森堂 森屋治兵衛 版」(裏見返し)

